黎明期の千島考古学と石川貞治

杉浦重信

〒076　北海道富良野市若松町17番1号　　富良野市郷土館

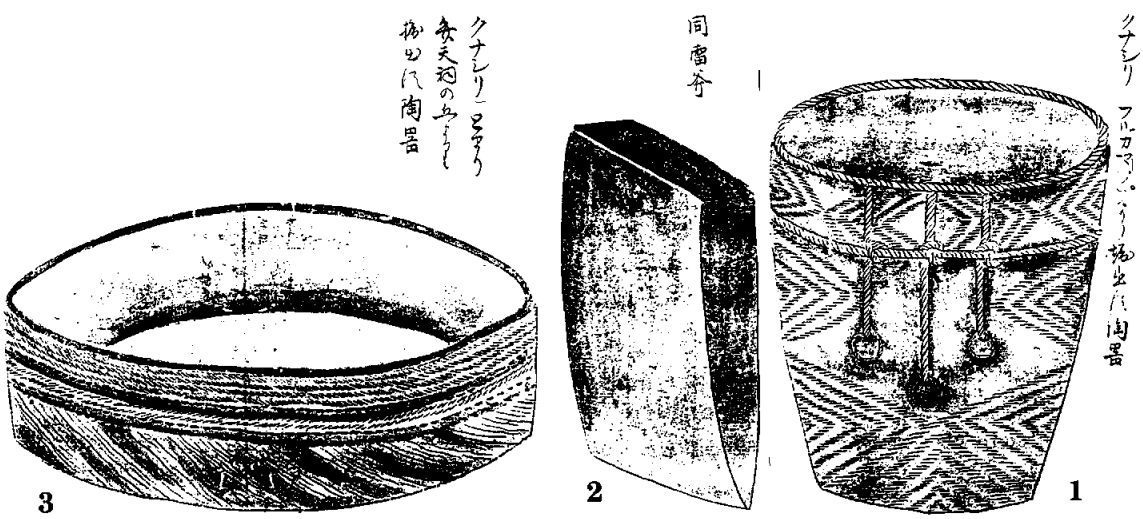
1．黎明期の千島考古学

千島における考古学的な知見は江戸後期にまで遡ることができる。1797年（寛政10)、幕府の命を受けて蝦夷地を調査した幕吏村上島之允（秦檍丸）は、1799年（寛政12)、この調査を基にアイヌの習俗を描いた『蝦夷島奇観』を著している。その中に函館周辺で発見された土偶・土器・石器などとともに、国後島出土の土器・石斧が墨書でかなり写実的に描かれている。第1図は東京国立博物館が所蔵している秦檍丸の自筆とされている堀田文庫の『蝦夷島奇観』（東博本）に掲載されている国後島出土の土器と石斧である。(註1)

1は古釜布出土の深鉢形土器、2も古釜布出土の磨製石斧である。1には貼付帯が縦横につけられており、垂下する貼付帯の先端はリング状をなしている。3は泊の弁天社の丘から掘り出された浅鉢形土器で、横位に数条の縄線文と貼付帯のような文様が見られる。1・3とも続縄文期の下田ノ沢式に近い特徴を有している。

周知のとおり、『蝦夷島奇観』は数多く伝写されており、流布本もいくつもの種類が存在する。それらには東博本にはない千島の考古資料があり、同一資料であっても説明が異なる場合も見受けられる。一例をあげると、『蝦夷島奇観』の流布本と思われる『箱松蝦深秘考』には東博本には見られない択捉島シャナ・国後島出土の土器があり、第1図3の浅鉢形土器はここでは釧路から出土したとされている。(註2）原型となった史料が散逸しており、その真偽を確認することはできないが、『蝦夷島奇観』が今のところ千島の考古資料を紹介した最も古い文献であることには異論がないであろう。

また、蝦夷地探検で知られる近藤重蔵（守重）も択捉・国後島で石鏃を数多く採集している。重蔵の考古学的な足跡については、すでに清野謙次博士が『日本人種論変遷史』の中で詳述している。



第1図　『蝦夷島奇観』に描かれた国後島出土の土器と石斧

（註３）それによると、重蔵の『邊要分界圖考』には国後島で石鏃を採取したことを記しており、石器天降説を否定して人工品であることを強調するとともに、新井白石と同じく中国の文献から粛慎石鏃使用説を論じている。

また、重蔵の未定稿の自筆本『石砮考』にも、択捉・国後島で採取した石鏃のことが触れられており、注目すべき見解を述べている。石鏃は人工品で、しかも鉄器時代以前のものであることを指摘している。その註に「本文ニ載スル北海アリウトスコイノ石矜ヲ見テ考ヘシ」と記されており、当時ロシア人によってラッコ猟のために中千島に移住させらたアリュートの石器を見て想起した説と思われる。江戸時代の弄石家には文化史的な時代区分の観念が乏しかった点を考えると、重蔵の説はまさに卓見であり、それが民族学的な比較によることも特に注視しなければならない。択捉島から出土する石鏃がカラフルで精緻なことはよく知られているが、重蔵も五色あると記している。

明治に入ると、外国人研究者がアイヌの民族調査に来道するようになり、まず1876年（明治８）にイギリス人の鳥類学者トーマス・W・ブラキストンが択捉島に渡航して竪穴群を発見している。しかしながら、ブラキストン自身は竪穴を調査せず、鳥類・魚類標本を採集したにすぎなかったようである。（註４）

1878年（明治11）には、イギリス人の地震学者ジョン・ミルンが北海道の貝塚から出土する土器に関心を抱き、トーマス・W・ブラキストンの助言を得て根室の弁天島を調査、択捉島に渡り、別飛・留別で多くの竪穴を発見して土器・石器などを採集した。さらに開拓使の玄武丸に乗船して北千島の占守島へ渡航したが、ここでは千島アイヌを調査したにとどまり考古学的な調査は行わなかった。ミルンは、本州の石器時代人はアイヌ民族であり、北海道の先史遺物はコロポックルが残したもので、千島アイヌはその子孫であるとの説を検証するべく千島の調査を行なったがその目的を果たすことはできなかった。（註５）

当時この説は大森貝塚を発掘したエドワード・S・モースのプレ・アイヌ説に対する新説であったが学会に影響を与えることはなかったようである。1886年（明治19）、渡瀬荘三郎が『人類学会報告』１号に「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」と題する報告の中で、コロポックルが竪穴を残したと論じたことが契機となって、揺籃期の日本考古学はコロポックル説・アイヌ説・プレアイヌ説など石器時代先住民族の人種論に焦点があてられ、華々しい論戦が交わされた。

こうした中にあって、1884年（明治17）、明治政府は北千島に居住していた千島アイヌを歯舞諸島の色丹島に強制移住させた。これ以降、高揚する人種民族論争を背景に南千島には内外の考古学・民族学・人類学の研究者が調査に訪れるようになった。1888年（明治21）には、アメリカ国立博物館の研究員ロマイン・ヒッチコックがアイヌ民族調査のために北海道を訪れて、色丹・国後島を調査している。（註６）1889年（明治22）には東京帝国大学医学部の小金井良精も色丹島・国後島に渡航、アイヌを人類学的な見地から調査して、アイヌ説を提唱した。（註７）その翌年にはA・H・サベージ・ランドーアがコロポックル説に基づいて色丹島のアイヌを調査している。（註８）

２．千島考古学の先駆者石川貞治

これらの調査・研究はいずれも人種民族論に偏重しており、具体的な遺跡・遺物に論及するまでには至らなかった。千島における考古学的な研究は、1899年（明治32）の鳥居龍蔵の調査によって先鞭がつけられたとされている。その調査報告である仏文の『考古学民族学研究・千島アイヌ』は国内外の研究者に多く引用されている権威ある基礎的な研究として知られている。（註９）

しかし、鳥居博士の調査以前に千島の考古学的な調査を敢行した日本人研究者がいる。それは北海道庁の技師で道内の地質調査に携わっていた石川貞治という人物である。管見の限り、千島の考古学的な調査・研究は1890年（明治23）の石川貞治による択捉島調査を嚆矢とするようである。いわば千島考古学の先駆者であるが、その足跡については、鳥居博士が最も注目すべきものとして貞治が著した『千島巡検雑記』を引用しているにすぎない。（註10）その後の馬場脩・木立勇などの研究史の中でも触れられておらず、戦後の研究においても文献名があげられる程度で、貞治の具体的な業績についてほとんど論及されていないまま今日に至っている。（註11）

北海道新聞社の『北海道百科事典』では生没も

不明のままで、同様の文献名が列記されているに過ぎない。(註12) 以下、鳥居博士の偉業の陰に埋没して忘れ去られている石川貞治の足跡の一端を紹介したいと思う。

3．石川貞治の生涯

貞治の経歴については、『北海道人名辞書』・『札幌之人』・北大『札幌同窓会第55回報告』に記載があり、その略歴を知ることができた (註13) それらによれば、貞治は1864年 (元治元) 現在の島根県浜田市に旧浜田藩士石川文治の四男として生まれている。大阪英語学校・東京英語学校に学んだ後、札幌農学校に入学、1888年 (明治21) 6月、同校を卒業している。

卒業と同時に、北海道庁に開設されたばかりの地質鉱山係に地質要員として採用され、そこで道庁の技師に招聘されていた神保小虎の指導を仰ぐことになり、1888年 (明治21) ～1891年 (明治24) に北海道全域を対象に実施された「北海道庁新鉱物調査事業」に携わった。(註14)

1892年 (明治25)、神保がベルリン大学に留学して職を辞すると、1892年 (明25) ～1895 (明28) に実施された同継続事業では、責任者として道内各地の地質調査を担当した。

この調査の中で、先住民族と竪穴とそこから出土する土器・石器に注目した貞治は、1889年 (明22) 『北海道に於て「アイヌ」人種研究の急務と石器時代住民の分布について』と題した論考を発表した。欧米人がアイヌ研究に奔走しているにもかかわらず、日本人による研究が立ち遅れていることを強調するとともに、アイヌ研究とアイヌ以前の先住民族の民族学・考古学的な研究の重要性を指摘した。そして、北海道の76か所の遺跡の概要を一覧表で紹介した。(註15) さらに翌年には、後述する択捉島調査を行ない、1891年 (明治24) に「千島国エトロプ島竪穴、古器物発見地」と題して、その成果を『東京人類学会雑誌』に発表している。(註16)

その後、1892年(明治25)～1896年(明治29)には、母校の札幌農学校本科の助教授を兼任して地質学を講義する一方、1894年 (明治27) には、軍艦磐城に便乗して北千島の地質調査を実施した。途中、寄港した択捉島紗那ではオホーツク文化の貝塚を発見した。また、中千島の捨子古丹島では竪穴住居跡群から縄文土器を採集した。、目的地の北千島では占守島別飛の竪穴を踏査している。(註17)

写真
石川貞治
(『札幌之人』より転載)

しかし、1896年 (明29) には拓殖省技師に転じたものの、翌年同省が廃止となったために廃官して、実業界に転身した。1898年 (明治31)、東京に「北海道鉱農商議館」を設立、北海道の鉱業・農業に関する事業のコンサルタントを行ない、さらに1904年 (明治37) には株式会社インターナショナルオイルコンパニーの本道石油事業に着手した。1908年 (明治41) には北海道幌向炭坑合資会社を組織し、1916年 (大正5) まで続けるが、同年7月、鉱区を譲渡し会社は解散した。その間、海軍省の内命を受けて、北樺太油田の調査に当たり、その基礎を拓き、南樺太の油田掘削、満鮮・北支の鉱産地の調査も行なった。

大正7年以降、北海道鉄道株式会社の創立発起人となり、日本採炭窒素株式会社の取締役に就任、あるいは北海道栄豊石灰山の採掘、さらには新日本社・拓殖産業会館・技労資協栄会などの発起、東北・北海道・樺太の航路開発の企画に奔走したが、1932年 (昭和7) 3月11日、内中耳炎を煩い、東京鉄道病院で逝去した。享年69歳であった。

4．明治23年の択捉島の調査と横山壮次郎

すでに述べたように貞治は、1890年 (明23) の択捉島地質調査に際して考古学的な調査も行なっている。東京人類学会雑誌の報文は、遺物を発見した地点の地名・種別 (内容)・立地などを地名ごとに表にしたもので、彼がどのようなルートで択捉島を調査したのかは触れられていない。

報文によると、択捉島のトシラリ・ピライシベ

ツ・トイタベツ・マクヨマイ・ナイボ・トーロ・ベットブ・オーヨベット近傍・シャナ（2か所）・アリモイ・ルベツ・トシモイ・タンネモイの計14地点で竪穴ないしは遺物散布地を発見しており、全島をかなり精力的に調査したことが窺われる。

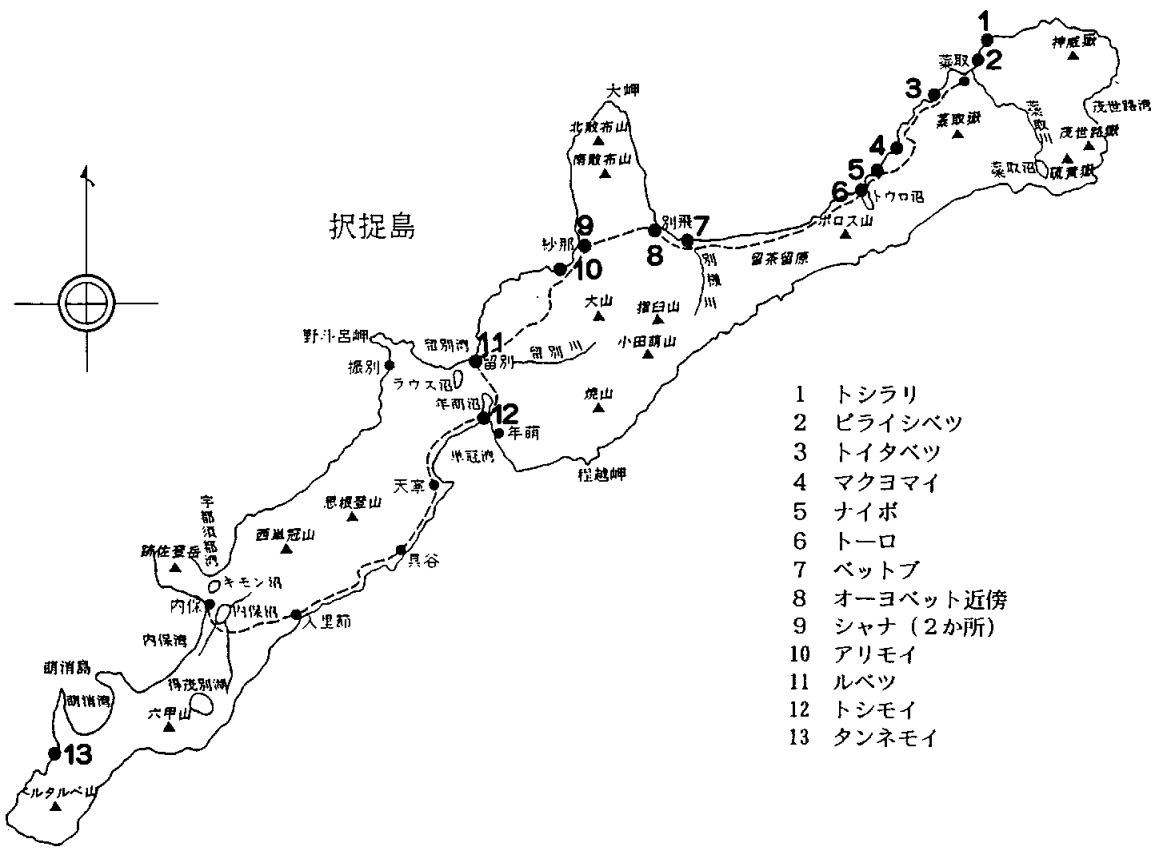
トシモイ以外はすべてオホーツク海岸で、太平洋岸では遺跡は発見できなかったと報告している。第3図は貞治が発見した遺跡の位置図である。なお、その図版には、アリモイで採集した石斧2点とベットブ出土の石鏃1点のスケッチが載せられている。

貞治とともに「北海道庁新鉱物調査事業」に携わった者に横山壮次郎という道庁の技手がいる。壮次郎は、1893年（明治26）8月、北千島に地質調査に赴き、占守島別飛の竪穴住居についても調査している。その調査の概要を『地学雑誌』に「千島巡検記」と題して連載しており、後にそれをまとめて同じ書名で単行本を刊行している。千島考古学の先駆者の一人であるが、貞治と同じく研究史の中でもほとんど論及されていないので簡単に紹介したいと思う。

その経歴は、新渡戸稲造編『横山壮次郎君』（明治43）に詳細にまとめられている。それによると、1868年（明治元）鹿児島県冷水町に士族の家に生れ、青山英和学校を経て、1885年（明治18）に札幌農学校に入学、1889年（明治22）卒業と同時に北海道庁に奉職、技手として先任の石川貞治とともに道内の地質調査に従事した。1892年（明治25）、札幌農学校の助教授を兼任したが、1895年（明治28）には、台湾総督府に転じて、農省官僚の道を歩んだ。1919年（明治39）には、清国政府の招聘により満州に渡り、1908年（明治41）応聘完了により帰国、同年郷里の鹿児島で脳充血に罹り死去している。

5．明治27年の千島調査

1894（明治27）年6月18日～7月6日には、軍艦磐城に便乗して、北千島の地質調査を行なっている。この調査については「千島巡検雑記」と題する紀行文を『東京地学協会報告16－3』と『地



第3図　石川貞治発見の択捉島の遺跡

質雑誌７－79』に連載しており、明治29年（1896）にはこれを『千島巡航紀事』と改題して『北海道庁地質調査鉱物調査第二報文』に収録している。

この報告から貞治の千島の考古学調査の足跡を辿ってみたいと思う。北千島に向かう渡航の途中、まず択捉島の紗那に寄港している。市街地の竪穴から縄文土器の破片が夥しく散在している地点を確認、また郡役所よりシャナ橋に下る地点の崖端では海獣と思われる骨層を発見、この層から土器・石鏃の破片を採集している。明治23年（1890）の択捉調査でも紗那市街で２か所同様な遺跡を確認していることが、すでに『東京人類学会雑誌』の報文に見られることから判断すると、前回の調査結果を踏まえて記載したと考えられる。

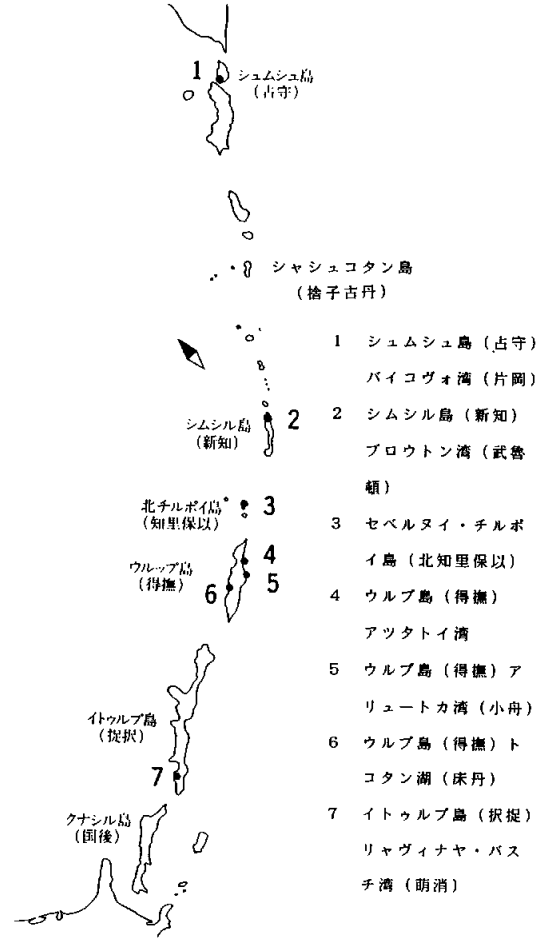
福士廣志は前者を「シャナａ遺跡」、後者を「シャナ貝塚遺跡」と命名して、シャナａ遺跡はユジノサハリンスク教育大学のＶ・Ａ・ゴルベフが調査した地点、シャナ貝塚遺跡は清野謙次が調査したシャナ貝塚に当たるとしている。筆者がサハリンの研究者から聞いた情報を総合すると後者のシャナ貝塚は、現在のクリリスクⅠ遺跡とほぼ同一地点と推定できる。（註18）

軍艦磐城は択捉島を離れて、得撫（ウルップ）島床丹湾を経由して千島の捨子古丹（シャスコタン）島に寄港した。この島には郡司成忠大尉が率いる千島報效義会の会員９名が冬営していた。今回の軍艦磐城の北千島への航海の目的は、実は郡司成忠大尉に率いられて北千島に越冬している千島報效義会の人々を引き揚げることにあった。当時、日本と清国との間の緊張関係が一段と進み、大戦となれば北千島への船舶の派遣が困難になるとの配慮からであった。

汽笛で合図を送ったが、何の応答もないことに不審を抱き上陸することになった。会員の築いた掘建て小屋を目指して断崖を登攀、小屋を捜索したところ室内に４名の死骸を発見した。死因は室内の通気不十分による一酸化炭素の中毒死であった。そして、残された日記から残る５名は対岸のエカルマ島に出漁したまま帰還せず悲運な事故に遭遇したことも判明した。一行は軍艦の名義をもって９名の葬儀を行いここに墓標を建てた。

貞治はこのような悲惨な現場に遭遇したにもかかわらず、付近の遺跡についても記録している。千島報效義会の会員が建てた小屋の周辺には竪穴住居跡が多くあり、その小屋も竪穴住居跡の上に建てられていたという。そして、次のような注目すべき発見を報告している。「余ハ、目撃セサリシ小屋の側ヨリ、縄紋アル土器石器其他赤色及ヒ緑色ヲ用ヰ草花ヲ書キタル磁器ノ破片ヲ得タリ。磁器ハ本邦製ノモノトハ思ハレズ、或ハ露国其他ノ外人ガ此地ノ居住セルコトアルカ、又ハ土人カ彼等ヨリ得タルモノカ詳ナラス。此地ノ穴居ハ「シュムシュ」島ニ於ケルモノノト其構造同一ナルガ如キモ著シク廃滅セリ。」（註19）

このように貞治は北千島に近いこの島で縄文が施された土器片を採集している。この土器が縄文土器なのか、それとも続縄文期の土器なのかは不明であるが、中千島にも縄文の施文された土器が確実に分布することを最初に報告したことの意義は大きいと言えよう。この点は鳥居博士も注目し



第４図　千島列島の18・19世紀のロシア人集落分布図（シュービン1990より転載・加筆）

ているが、のちの研究者の目にとまることなく、今日に至ったようである。

戦前の中千島は農林省の管轄下にあり、民間人の立ち入りが禁止されていたために、考古学的な調査は皆無で、島に駐在していた農林省の職員が持ち帰った資料が若干報告されているに過ぎない。杉山寿栄男が新知島武魯頓湾から出土した特異な文様帯をもつオホーツク式に類似した甕形・鉢形を呈する土器（註20)、稲生典太郎が武魯頓湾出土の石器（註21)、北構保男が武魯頓湾出土の続縄文と思われる深鉢形土器（註22)、馬場脩が武魯頓湾出土の内耳土器及び武魯頓湾・得撫島小舟湾出土のアリュートの骨角器を報告しているにすぎない。(註23)

戦後のロシア側の調査では新知島・北知理保以島で北海道の続縄文系の土器が検出されており（註24)、最近では得撫島のアリュートカ湾岸遺跡でもこの種の土器が発見されている。(註25) 北千島にも縄文の施文された土器が断片的ながら分布するとされており、日本の縄文文化がどこまでどのように北進したのかは民族的な問題を含めて極めて重要な研究課題であろう。

次に赤・緑色で描かれた草花の磁器の破片であるが、貞治が推定しているようにロシア人がもたらしたものであろう。18～19世紀にかけてロシア人はアリューシャン列島の原住民であるアリュートを使役してラッコ猟を中千島で盛んに行なった。サハリン州郷土誌博物館のV・O・シュービン等による当時のロシア人集落の発掘調査も実施されている。貞治が発見した集落の一部にも、ロシア人やアリュート族の生産拠点の一つであったと考えられるが、露化した千島アイヌの遺した集落の可能性も否定できない。しかし、この発見についても後世の研究者に注目されることもなく推移したようである。

第4図に貞治の千島調査のルートと捨子古丹の位置を理解していただくために千島とロシア人集落の分布を示した。(註26)

軍艦磐城はここから一路最終目的地北千島の占守島向かった。しかし、この時大陸では日本と清国が朝鮮半島の利権をめぐって対立が激化、戦争へ突入する緊迫した状況下に置かれていた。このため軍艦が至急回航しなければならず、占守島での日程も大幅に短縮せざるを得なかった。6月28日、艦艇は越年していた千島報効義会の人々の熱烈な歓迎を受けて占守島の片岡湾に入港した。ここでも幌筵島で単独越冬していた和田平八の訃報に接した。彼は日本人の入植を推進する郡司大尉とは正反対の立場にあり、千島アイヌの故郷への帰還を主張して、報效義会の説得を退けて幌筵島で単独越冬していたのであった。

貞治は、6月29・30日の二日間だけ占守島に上陸して調査を行なった。北千島アイヌの居住地であった別飛に向かい、そこで17・18軒の竪穴住居跡を発見している。前年、同僚の横山壮次郎が調査した地点と同一で、1937年（昭和12）馬場脩が調査した別飛遺跡にあたる。竪穴住居跡は内部の用材や上部の土層が旧形を残すものと、単に竪穴様の窪地をなすものの二つのタイプがあり、両者は同一もので後者は前者が廃滅してかなりの歳月を経たものと判断した。内部構造が分るものは単室で小型のものと複室式で大型のものとがあると報告している。そして、竪穴群がある台地の裾を流れて相原湖に注ぐ川の河岸にも竪穴群が点在すると記している。7月1日、軍艦磐城は郡司大尉以下千島報效義会の会員を乗せて、さらに越年する南極探検で知られる白瀬矗中尉と交代要員5名の隊員に見送られて、占守島片岡湾を出港、7月6日、根室港に無事帰着した。

5．結　語

千島考古学は江戸後期の村上島之允・近藤重蔵の蝦夷地探検に端を発して、明治初期にはミルンをはじめとして外国人研究者によって千島アイヌとの関連で調査が盛んに行なわれた。坪井正五郎のコロポックル説は、石器時代人の人種民族論争の導火線に火をつけることとなり、千島列島も学会の注目を浴びることになった。しかしながら、冒頭で述べたように遺跡・遺物に立脚した実証的な考古学研究はなされず、人種民族論争だけが高揚したにすぎなかった。

暗黒界の千島の先史文化に一条の光明を照らしたのは、当時、東京帝国大学人類学教室の助手であった鳥居龍蔵であった。鳥居は師事していた坪井正五郎に委任されて、北千島の人類学調査に派遣されることになり、1899年（明32）5月、北洋警備に向かう軍艦武蔵に乗船、色丹・択捉を調査したのち、目的地の北千島に向った。翌年には、

河野常吉が道庁参事官高岡直吉に同行して北千島を調査、その調査報告書『北千島調査報告文』では人類学・考古学部門を担当・執筆した。(註27) 黎明期千島考古学は鳥居・河野の調査によってその概要がはじめて明らかとなったと言っても過言ではない。

しかしながら、これ以前に千島を調査した研究者に石川貞治なる人物がいた。その足跡については研究史の中でもほとんど語られることはなかった。本稿では、鳥居龍蔵・河野常吉の偉業の陰に埋没していた貞治の業績と略歴に主眼を置いて紹介した。

北大の『札幌同窓会第55回報告』の文末に、「誠に時流に一歩先だったアンビシアスな一生であったが、酬いられることは豊かでなかった」と記されている。このことが何を意味するかは、略歴程度の資料しか残されていない現在では推測の域を出ないが、その非凡な才気を発揮できない不運な境遇に置かれたことを評しているのであろうか。

執筆に当たり、関秀志氏・川上淳氏・小野裕子氏には文献・資料の面で絶大なるご協力を賜わり、東京都に在住しておられる石川貞治の次男石川大介氏には種々のエピソードを拝聴させていただいた。ここに衷心より感謝の意を表するしだいである。

なお、本稿は筆者に与えられた平成3年度文部省科学研究費補助金奨励研究(B)・研究課題「北方領土における先史時代の遺跡分布について」の成果の一部をなすことを附記する。

註1　佐々木利和・谷澤尚一（研究解説）1982『秦　檍麿直筆　蝦夷島奇観』雄峰社

註2　清野謙次　1944　「蝦夷図譜，特に蝦夷島奇観系統本に就いて」『太平洋に於ける民族文化の交流』所収　pp.200～237　太平洋協会

註3　清野謙次　1944　「近藤正齋の人種論」「近藤守重著『石器考』」『日本人種論変遷史』所収　pp.185～206　小山書店
近藤正齋　1906　「邊要分界圖考」『近藤正齋全集　第一』第一書房

註4　彌永芳子　1979　「付篇　トーマス・W・ブラキストン伝」『蝦夷地の中の日本』所収　pp.447～633　八木書店

註5　John Milne 1879「Notes on the Koro-pok-guru or Pit-dwellers of Yeso and the Kurile Isiands.」 Transaction of the Asiatic Society of Japan, Vol 10, pp.187～198

註6　R.ヒッチコック・北構保男（訳）1983『アイヌ人とその文化　明治中期のアイヌの村から』六興出版

註7　小金井良精　1889　「北海道石器時代の遺跡に就て」『東京人類学会雑誌4-45』pp.2～7

註8　北構保男　1978　『明治二十三年A・H・サベージ・ランドーアひとり蝦夷地を行く（釧路・根室・千島・北見の部）』私版

註9　鳥居龍蔵　1919　Etudes Archéologiques et Ethnologiques, Les Aïnou des Iles Kouriles. Journal of the College of Science. Tokyo Imperial Univerisity, Vol. XL Ⅱ Art. 1, pp.1～337
小林知生訳　1975　「考古学民族学研究・千島アイヌ」『鳥居龍蔵全集　5』, pp.331～553　朝日新聞社

註10　鳥居龍蔵　1903　『千島アイヌ』吉川弘文館

註11　馬場　脩　1939　「考古学上より見たる北千島」『人類学先史学講座　10』pp.1～107
木立　勇　1942　「北千島の考古学的概観」『史前学雑誌　14-4・5』pp.1～33
菊池敏彦　1976　「ソ連邦における樺太・千島の考古学研究動向」『考古学ジャーナル　124』pp.14～21
五十嵐国宏　1989　「千島列島出土のオホーツク式土器」『根室市博物館開設準備室紀要3』pp.9～23

註12　千葉英一　1981　「石川貞治」『北海道大百科事典（上）』pp.129　北海道新聞社

註13　金子郡平・高野隆之　1914　『北海道人名辞書』pp.21～22
鈴木源十郎　1915　『札幌之人』pp.29札幌同窓会　1934　『札幌同窓会第55回報告』pp.25～26
札幌市教育委員会編　1985　『新聞と人名録にみる明治の札幌』pp.302～303

註14　北海道における明治期の地質学的研究については，下記の文献に詳述されている．
湊　正雄　1982　「北大における地質と北海道」
『北大百年史通説』　pp.893～907　北海道大学
佐々保雄　1962　「北海道地質図変遷史(一)」『北方文化研究報告』pp.1～38
石川貞治　1928　「北海道探検当時の挿話」『石炭時報3－7』pp.43～47

註15　石川貞治　1889　『北海道に於て「アイヌ」人種研究の急務と石器時代住民の分布について』『東京人類学会雑誌4-38』pp.311～316

註16　石川貞治　1891　「千島エトロプ島竪穴，古器物発見地」『東京人類学会雑誌6-59』pp.173～175

註17　石川貞治　1894　「千島巡検雑記」『東京地学協会報告　16-3』
1895　「千島巡検雑記（承前）」『地学雑誌7-79』pp.372～377
1896　「千島巡航紀事」『北海道庁地質調査鉱物調査第二報文』pp.88～109
なお，斉藤忠氏は択捉島別飛の竪穴群出土の土器・石器を報告した際，註の中で貞治の「千島巡検雑記」を原文のまま引用して遺跡の説明を補っている．しかし，この引用は間違っており，貞治が報告したのは北千島の占守島の別飛の竪穴群であり，択捉島の別飛ではない．
斉藤　忠　1933　「千島択捉島出土の土器及び石器」『考古学雑誌23-6』pp.333～344

註18　福士廣志　1991　「南千島エトロフ島シャナ出土の石器について」『留萌市海のふるさと館紀要　2』pp.45～64
清野謙次　1969　「第6篇　千島エトロフ島シャナ貝塚」『日本貝塚の研究』pp.535～537　岩波書店
V・A・ゴルベフ・中村嘉男（訳）1975　「クリール列島の古代文化」『シベリア極東の考古学　①極東篇』pp.164～173　河出書房新社

註19　句読点は筆者が加筆した。

註20　杉山寿栄男1931　『日本考古圖録大成　14輯　縄紋土器』pp.15～16
なお、上記の図版と同じものが、犀川会1933　『北海道原始文化聚英』にも掲載されている。

註21　稲生典太郎　1938「北海道オホーツク沿岸出土石器の一部に就いて」『史前学雑誌10-1』pp.9～21

註22　北構保男　1943　「千島の縄文土器」『古代文化14-1』pp.49～50

註23　馬場　脩　1940　「日本北方地域及び附近外地出土の内耳土鍋に就いて」『人類学・先史学講座14』
馬場　脩　1943　「千島に於けるアリュート族」『民族学研究1－8・9』

註24　V.O. Shubin 1989 Polevye Issledovaniya na Kuriljskikh Ostrovakh v 1987g. Polevye Issledovaniya na Skhaline i Kurijskikh Ostrovakh, pp. 5-37 Yazhno-Sakhlinsk.
(V.O. シュービン　1989　「1987年のクリル諸島の野外調査」『サハリン・クリル諸島の野外調査』ユジノサハリンスク)

註25　右代啓視・手塚薫　1992「ウルップ島アリュートカ湾岸遺跡出土の遺物」『1991年度北の歴史・文化交流事業　中間報告』pp.79～90　北海道開拓記念館

註26　V・A・シュービン・兪松根（訳）・菊池俊彦（校）1990
「千島列島における18－19世紀のロシア人集落」『北海道考古学　26』pp.91～112
なお、第4図中のカタカナは現在のロシア地名、（　）内は旧日本地名である。

註27　河野常吉　1900　「北千島土人」『北千島調査報文（北海道庁参事官高岡直吉復命書）』所収　pp.89～102　北海道庁